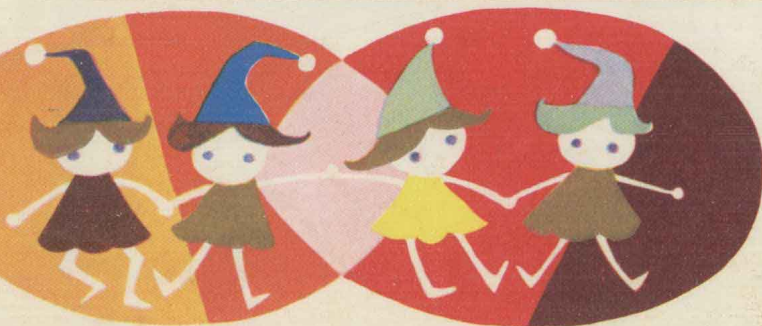
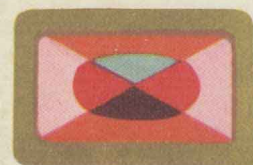


ものぐさ太郎^{たろう}

日本昔話

土家由岐雄編著



世界名作童話全集

ものぐさ太郎



日本昔話

土家由岐雄編著

土 家 由 岐 雄 編著

も の ぐ さ 太 郎

ポプラ社 昭和52 (1977)

158p 23cm (世界名作童話全集 31)

[分類] 913

世 界 名 作 集^㉑
童 話 全 集

著者との話し合い
により検印を廃止



も の ぐ さ 太 郎

昭和39年2月25日 初版
昭和52年6月30日 21版©

著 者 つち や ゆ き お 雄
土 家 由 岐 雄

発 行 者 久 保 田 忠 夫

印 刷 所 株式会社須藤印刷

発 行 所 株式 会社 ポ プ ラ 社

東京都新宿区須賀町5
振替東京 4-149271 番

(落丁・乱丁本はいつでもおとりかえいたします)

(島田製本)

はし が き

むかしから、日本^{にほん}に つたわって いる たのしい
お話を^{はなし} 四つ あつめました。『ものぐさ太郎^{たろう}』『はま
ぐりひめ』『おにたいじ』『はちかつぎひめ』と、だい
を みただけでも、その おもしろさが わかります。

これらの お話^{はなし}は、みなさんの とおい おじいさんや
おばあさんが、よろこんで よんだり きいたり した ものです。

その お話^{はなし}を いま、みなさんが よめば、むかしの 人^{ひと}たちの たのしみ
や、やさしさが わかって、おとうさんや、おかあさんを だいじに する
きもちが、わきおこって きます。そして、ふしぎにも、こころが うつくしく
なっ て きます。





もくじ

ものぐさ太郎……………

ころがったもち……………

あんずの花のさくころ……………

およめさんがし……………

さむらいになるけいこ……………

こやからでたまきもの……………

はまぐりひめ……………

海からきたおよめさん……………

七

七

六

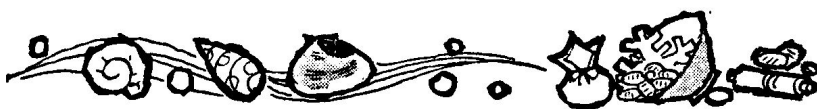
四

二

二

六

六





うまに のった おじいさん 八

お に た い じ 一〇

さらわれた おひめさま 一〇

とびかかって きた くび 三

はち かつ ぎ ひ め 三

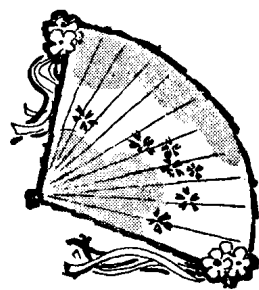
あたまに すい った はち 三

よめ さ ま く ら べ 四

ご 両親^{りやうしん}や 先生方^{せんせいがた}へ 五



さ　　そ
し　　う
え　　て
石^い　川^が
井^ゐ　本^{もと}
健^{けん}　哲^{てつ}
之^の　夫^お



世界名作童話全集

ものぐさ太郎



土家由岐雄



ものぐさ太郎

ころがったもち

むかし、信濃の国（いまの長野県のこと）の山のなかに、あたらしごうという、さびしい村がありました。

その村に、かわった男がひとりすんでいました。

なまえは、なんというのかわかりません。どの人も、その男を、『ものぐさ太郎』とよんでいました。

ものぐさとは、めんどろくさがって、なにもしない人のことをいいます。

なにも しなければ、
おかねを かせぐ
ことが できません。
家をたてることも、
たべものを かう
ことも できません。
ものぐさ太郎は、
しかたなく、みち
ばたに、四本の
たけの はしらを
たてて、その 上に
むしろを かぶせて、



やねの かわりに して いました。そして、その
下^{した}に ねころんで くらして いました。

「しようがない男^{おとこ}だ。たべものをやらなければ
しんで しまうだろう。」

おひやくしょうさんたちが、こうきのどくに
おもって、ときどき、まくらもとへ たべもの

などを おいて かえりました。

ものぐさ太郎^{たろう}は ねころんだまま、

手を のばして、その にぎりめしや

くだものなどを、むしゃむしゃと

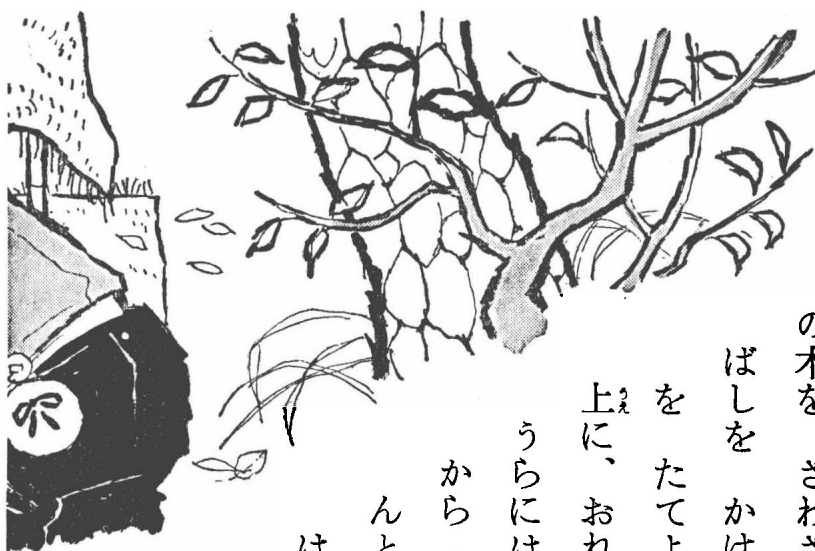
たべながら、ひとりごとを

いうのでした。





「おれに おかねが あつ
たら、とても すばらし
い ごてんを たてるん
だがな。まず、ごてんの
まわりに たかい へい
を めぐらして、りっぱ
な 門を 三つ つくろ
う。それから、にわの
東西南北に、ひとつずつ
いけを ほるんだ。どの
いけの まんなかにも、島を
つくって、まつの木や、すぎ



の木を ざわざわと うえよう。島から にわへは たいこ
ばしを かけて、その とおくに けらいたちの やしき
を たてよう。その やしきが みおろせる おかの
上に、おれの でっかい ごてんが あって、ごてんの
うらには、うまやも ある。うまやには 日本じゅう
からすぐれたうまをよせあつめて、ひひんひひ
んと、いくひきもはねさせておこう。だが、いま
はおかねがないから、このこやで、しずかに
うたでも つくって くらして いよう。」
ものぐさ太郎は、こんな のんきなこ
とを いいながら、花の さく 日も、
せみの なく 日も、こやの なかに



ねて くらして いました。

その うちに、秋風^{あきかぜ}が さやさやと
つめたく ふきはじめて、虫^{むし}の 声^{こゑ}が
ちろちろと、こやを かこみはじめまし
た。朝^{あさ}も 夜^{よる}も、山^{やま}のおちばが、こやの
なかに ひらひらと いくまいも ふき
こんで きました。

「かわいそうに。あいつは、どう して
いる ことだろう。」

ある日^ひ、こう いて、ひとりの おじ
いさんが 山^{やま}みちを のぼって、ものぐ
さ太郎^{たろう}の ところに きました。

「あいかわらず 手足を のばして ねて いるな。はらが すいてる こと
だろう。きのどくな ことだ。これでも おたべ。」

おじいさんは、ものぐさ太郎の あたまの よこに、つきたての まっしろ
い もちを、五つ おいて かえりました。

太郎は、いく日も、なにひとつ たべて いませんので、ひもじくて なり
ませんでした。だまって うでを のばすと、たちまち、もちを 四つ、ペろ
りっと つづけざまに たべて しまいました。

「さて、のこったひとつを どうしようか。いま たべて しまうと、あとで
おなかが すいた ときに こまるぞ。でも、いま たべたくて ならないな」
太郎は、どう したら よいかと かんがえながら、しばらくの あいだ、
むねの 上で、もちを なでたり たたいたり なめたり して いました。
その うちに、どう した はずみか、もちは ころりっと 手から すべり



おちました。ころころと ころがって、み
ちの まんなかに とまりました。手^てを
のばしても とどきません。

「おきて とりに いくのは めんどうだ。
その うちに だれか とおるだろう。
とおったら、よびとめて ひろって も
らおう。」

太郎^{たろう}は、もちを にらんだまま、ねころ
んで いました。すると、まもなく、一ぴ
きの いぬが きました。もちに ちかよっ
て、においを かぎはじめました。

「たべては こまるよ。しっ、しっ、しっ。」

太郎は、あたまの

そばに おいて

ある たけの

さおを ふって、

いぬを おいは

らいました。

いぬは、はらの

下に しっぽを

まるめて にげると、

こんどは すずめが 十ぱ

ほど おりて きました。

そろって もちを つつきはじめました。

